

Title	久留間鮫造 玉野井芳郎著 経済学史
Sub Title	
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.3 (1955. 3) ,p.257(73)- 258(74)
JaLC DOI	10.14991/001.19550301-0073
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550301-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

反動(さきの株仲間統制をはじめとする諸政策)を媒介として農民的商品經濟、そのブルジョア的發展が分裂せしめられたことを意味する。

そしてかかる分裂政策は、農村支配者層(上層農民)の特權化、領主的コースへの編入という形で幕末期にあらわれて来るが、明治以後とくに十四年の政變以降になつて新しいより明確な形をとる。すなわち、明治十四年以降の政府の財政經濟政策は、特權的政商資本の工場資本への轉化を保護育成したばかりでなく、地方農村におけるかつての村落支配者層(寄生地主マニユファクチュア)を貧農一般農民層(小作人IIプロレタリアート)から保護し特權化せしめることとなり、「上から」の國會開設によつて板垣のいわゆる「豪家ノ農商」の國政への參加の道を開いて、かれらの專制政府に對する攻撃を挫折せしめる役割を果たした。

かくして、舊幕藩體制の領主的土村所有に代る農民的土地所有(その内容は寄生地主的土地所有)を物質的基礎とし、「豪家ノ農商」を階級的基礎とする絶對主義天皇制が確立するのであつた。

以上を要するに、明治維新(氏は、この時期を天保八年から明治一七年又は二二年までとする)の政治過程は、維新の主體勢力たる村落支配者層が惣百姓一揆を通じて國家權力の中へ進出して行く過程であつて(これに應じて權力の性格は純粹封建的なものから絶對主義的なものへと變化して行く)、それ故、さきの小營業段階はこの絶對主義形成期の農民闘争の形態たる惣百姓一揆を規定する經濟規定であつたのである。

本書の發表によつて、堀江氏の從來の見解を經濟主義とする批判は最早當らぬものとなつたといえよう。とくに毛澤東の矛盾論の適用によつて、今までとかく不明確であつた幕藩體制の

諸矛盾が見事に整理され、藤田五郎氏などに見られた三つの階級關係という平面的な見解は、これによつて完全に克服された。又經濟規定の面についても、「農民的土地所有」範疇の大膽な適用によつて、寄生地主制の半封建性の積極的な解明が意圖され、豪農に對立する一般農民層の中から、嚴密な意味での「中農層」についての意義と役割に注目されている等、いわゆる「二つの途」の問題はより發展的に取扱われている。

しかしその反面、殘された問題もまた幾つかある。例えば、階級關係の變更、矛盾の位置の轉換によつて成立した維新體制の矛盾の構造(これは第六章の第三節に明示されている)が、この體制の下で確立する日本資本主義の諸矛盾とどのようになるのであろうか、この點はたしかに本書の領域外の問題であらうが、維新史研究にとつては殘された大きな課題である。又、矛盾の側面をなす諸階層、とくに村落支配者層や一般農民層(とりわけ中農層)の性格規定が積極的になされていなかった、今までいわれる構造分析の觀點からのみこの規定を行つていた一般の方法が何故、又いかに改められねばならないか、この邊明瞭でない憾みがある。更に、農民層の分解における中農層の問題については、天保期におけるその上昇の挫折・分解が地主手作の解體の中で論ぜられているが、この地主手作が古い農奴主經營の性格のものであるとすれば、このような性格は中農層の場合にはどうなるのであろうか。又村落支配者層の性格規定に關連して、本書では「寄生地主IIマニユファクチュア」なる範疇が、フランスの場合の「市民的土地所有」の事例を論據として、極めて當然のものとして前提されているが、果してこのような「型」、範疇が何故成立し得るのか、この問題も今までの構造分析の制約をはなれて考えねばならぬ問題である。とはいへ、明治維新史研究における本書の意義は舊著「存在

形態」のそれに劣らず大きなものといわねばならない。(有斐閣、二二二頁、昭和二十九年九月二十五日、A5版、三〇〇圓)

(尾城 太郎丸)

久留間敏造 著
玉野井芳郎 著

『經濟學史』

さいきんの日本の經濟學界のあたらしい傾向の一つとして經濟學史の研究がさかんとなつてきたことがあげられるであろう。いまそのうちから注目すべき著作としてつぎのものをあげたい。

出口勇藏氏編『經濟學史』(昭和二十八年、ミネルヴァ書房)
内田義彦氏著『經濟學の生誕』(昭和二十八年、未來社)
水田洋氏著『近代人の形成』(昭和二十九年、東京大學出版會)
水田洋氏著『アダム・スミス研究入門』(昭和二十九年、未來社)

高島善哉氏編『古典學派の成立』(昭和二十九年、河出書房、
『經濟學全集』第二卷)

さいこの書物は、私自身も執筆者の一人なのでここに掲げるのをいささかちゆうちよしたがるが、私の論稿は別として、日本におけるスミス研究の水準を示すものとして、またスミス研究の問題意識の所在を示すものとして、充分に注目にあたいたいと思う。

そしていまここに紹介の對象とする久留間、玉野井兩氏の共著『經濟學史』も日本における經濟學史の在り方について反省のいとぐちをあたえるものとして注目されてよい。著者たちのはしがきによれば、本書は、マルクスに先行する經濟學の歴史を對象として、科學としての經濟學の發展の大筋を、その主流

書評及び紹介

七三 (二五七)

に即してできるだけ正確に描出しようとしたものである。ここで主流といわれているものは、(第一章)「概説」において資本主義の發展に照應して區分された經濟學の段階にしたがつてケネーによつて代表される「フイジオクラシー」(第二章)、スミスおよびリカードによつて代表される「古典學派」(第三章)、マルサス、トレンズ、ペイリー、J・ミルによつて代表される「古典學派の解體」(第四章)、さいごにホジスキンス、ラムジイ、ジョーンズによつて代表される「古典學派からマルクスへの過渡」(第五章)である。このうち第一章、第二章および第三章を久留間氏が擔當され、第四章、第五章を玉野井氏が擔當されている。久留間氏の執筆部分は同氏の舊著『經濟學史』(昭和二十三年、河出書房)を加筆されたものである。また玉野井氏の執筆の主要部分は同氏の著書『リカードからマルクスへ』(昭和二十九年、新評論社)をさらに要約されたものとみられる。そういう意味で本書は充分の準備と検討を経たいわば手堅い著作である。

本書であつかわれる時代は前述の如くフイジオクラシーからマルクスのあらわれる以前までであるが、あつかわれる問題は主として價值論である。くわしくいへば、價值論、剩餘價值論、生産價格論である。だから本書は實質的に名づければ、一長洲一二氏の適切にいわれているように『思想』昭和二十九年一月號)「イギリス古典派價值論史」である。これからただちに類推されることは、本書がマルクスの『剩餘價值學說史』全三巻に依據しているということである。じつさい、内容をみれば、『剩餘價值學說史』に極めて忠實に依據して、同一の問題を追求していることがわかる。たとえば、第三章の古典學派の部分では、『剩餘價值學說史』の第一、二巻におけるスミス、リカード批判にしたがつて、價值論の基本命題が分析された

り、剩餘價値の源泉観が検討されたり(第二節)、剩餘價値と利潤と平均利潤との混同が批判されたり(第三節)、價値の生産價格への轉化の無理解が論難されたりしている(第四節)。また、第四章の古典學派の解體の部分では、解體の契機として、價値法則を基礎として剩餘價値の發生や利潤率の均等化が展開されなかつたことがあげられている。岡茂男氏が本書を評して、「ここにケネーからマルクスに至る科學としての經濟學の發展史が初めて『剩餘價値學說史』に則して統一のつかつ體系的に敘述された」とのべられる所以である。『日本讀書新聞』、昭和二年一月一日號)また吉澤芳樹氏が『剩餘價値學說史』の手堅い一解説書であると同時に、『資本論』の理解を側面から深めるものとなつてゐる。とのべられる所以である。『圖書新聞』、昭和二年一月三日號)

だが實はここに問題があるのである。『剩餘價値學說史』に則して經濟學史の著述をするといふことは、はたしてこんにち經濟學史の研究に従事するものとして、ただし態度であらうか? いうまでもなく『剩餘價値學說史』に依據して經濟學の歴史を検討するといふこと自體はあやまりではない。しかし『剩餘價値學說史』はもともとマルクスによつて體系的に經濟學史として執筆されたものではない。それは「剩餘價値に關する諸學說」とマルクス自身によつて題された草稿であり、『資本論』第四卷としてエンゲルスによつて刊行されるはずのものであつた。『資本論』第二卷序言參照。マルクスの當初のプランではこれとは別個に「經濟學と社會主義との批判と歴史」が豫定されてゐたようである。(マルクスよりラツサル宛、一八五八年二月二日附書翰參照。)ここで私たちはマルクスの「經濟學プラン」に占める『資本論』の位置を想起する必要がある。價値論が經濟學體系の核心をなすにしても、價値論の歴史はし

よせん價値論の歴史であつて本來の經濟學史からみて相當の距離があるといわねばならない。そのことがひとつ。それから、本書の敘述様式、およびそれを制約する方法論であるが、「論理主義」という言葉でこれを特徴づけうるであらう。さいきんの日本の經濟學界では經濟學史の方法として從來のこのような偏狭固陋な學說史的方法を克服することを一つの課題としてゐる。そのために社會經濟史的方法のアプローチや社會思想史的方法の採用されたり、あるいは、このようないわば「歴史主義」的な課題を擔つた、經濟學史の「戦後派」的形態である。私は、こんにち經濟學史を研究するものは、この方法論議を通過することなしには、自己の研究に現代的意義を賦與しえないと思ふ。しかるに本書中にはこのような問題意識が全く缺けてゐる。この點、本書は戦前の「論理主義」の典型である舞田長五郎氏著『經濟學史概要』上卷(昭和二年、岩波書店)と同一の類型と水準にぞくするものである。そして注意されねばならぬのは、本書のこの二つの缺陷が相互に關聯してゐるということである。

經濟學史はいかにすれば、一個の獨立の科學たりうるか? 換言すれば、經濟學史の獨自の對象と方法とは何であるか? また經濟學史研究の現代的意義は何であるか? この二つの根本問題が徹底的に追求される過程のなかでこそ、眞の經濟學史がうまれてくるであらう。(岩波全書、三六七頁、一九五四年九月七日、二八〇圓) (遊部 久藏)

經濟學關係文献目錄

(昭和二十九年十一月刊)

理論・學說・經濟思想

- * 厚生經濟學 3 ビグウ著・永田清他譯 A 5、四一八頁 五〇〇圓 東洋經濟新報社
- * 若ものたちの經濟學 下 守屋典郎著 B 6、二二二頁 九〇圓 三一書房
- * マルクス主義政治經濟學入門 下 レオンチエフ著 野間清譯 B 6、二四二頁 二一〇圓 三一書房
- * 近代經濟學の展望 稻葉四郎著 A 5、二五五頁 四六〇圓 三和書房
- * 經濟思想發展史 3 社會主義と歴史學派 スピーゲル編 越村信三郎、古澤友吉監譯 B 6、三四八頁 三〇〇圓 東洋經濟新報社
- * 經濟政策原理(勁草全書) 宮田喜代藏著 B 6、三二六頁 三二〇圓 勁草書房
- * 計量經濟學 鈴木諒一著 A 5、二六八頁 五五〇圓 紀元社
- * 經濟學入門(朝日文化手帖) 都留重人著 規外一八四頁 一〇〇圓 朝日新聞社
- * 厚生經濟學 長守善著 A 5、一九八頁 二八〇圓 有斐閣
- * 經濟學入門 改訂10版 波多野鼎著 B 6、三四九頁 三二〇圓 有斐閣

經濟學關係文献目錄

財政・金融・保險・證券

- * 經濟循環の構造(經濟發展研究會叢書) 市村眞一著 A 5、三〇二頁 三八〇圓 創文社
- * 政治經濟學の方法論(青木文庫) 王學文著 新民主主義經濟研究會譯 A 5、一九四頁 八〇圓 青木書店
- * 經濟學原論 新訂版 チャツプマン著 犬丸秀雄譯 A 5、一六七頁 二八〇圓 寶文館
- * 資本主義か社會主義か 松山茂二郎著 A 5、二七〇頁 三〇〇圓 關書院
- * 資本主義 牧野純夫著 B 40、三〇五頁 一六〇圓 新評論社
- * 現代資本主義の經濟と政治 1 宇佐美誠次郎、長洲一二他編 A 5、三〇二頁 三二〇圓 大月書店
- * 經濟思想發展史 4 限界效用學派 スピーゲル編 越村信三郎、山田長夫監譯 B 6、三〇〇頁 二九〇圓 東洋經濟新報社
- * 資本論に關する手紙 上 マルクス・エンゲルス著 岡崎次郎譯 A 5、二四八頁 三〇〇圓 法政大學出版局
- * 金融論(經濟學演習講座) A 5、四六九頁 五五〇圓 青林書院